

# 高崎城遺跡 21

前橋地家裁高崎支部庁舎耐震改修等工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

東京高等裁判所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 高崎城遺跡 21

前橋地家裁高崎支部庁舎耐震改修等工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

東京高等裁判所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



1 2区-①東側で検出した埋門南堀南岸の状況と陶磁器出土状態。地山の右手に深く掘り込まれた堀の断面が見える。陶磁器はくぼみに投げ込まれたか、穴を掘って埋められた。



2 出土陶磁器の多くは、東京鎮台高崎分営（～明治17年）の時期に使われたらしい。

# 序

前橋地方家庭裁判所高崎支部は、平成23年度に耐震補強等の工事が計画されました。東京高等裁判所の依頼により群馬県教育委員会文化財保護課が試掘調査を実施したところ、高崎城本丸の東側に位置する梅ノ木郭南側の堀に相当することが確認されたことから、当事業団が平成24年度に本調査を実施することとなりました。

高崎城は慶長3年(1598年)、井伊直政が幕命により築いた城で、戦国期の和田城を取り込み、烏川の東側崖上に築かれ、三重の堀に囲まれていました。

今回の発掘調査区域は、現在の前橋地方家庭裁判所高崎支部庁舎の南側に位置し、絵図等を参考にすると、高崎城中枢部の本丸東側に連なる梅ノ木郭の南辺に設置された、埋門と呼ばれた門の南側堀の南岸付近と推定されます。

調査区域はごく狭い範囲でしたが、梅ノ木郭の一部を明らかにでき、今後、高崎城の往時の姿を解明できる貴重な資料を提供したと思われます。

調査に際しては、東京高等裁判所、前橋地方家庭裁判所高崎支部、群馬県教育委員会、地元高崎市教育委員会ほかの関係各機関の御協力に厚く感謝申し上げますとともに、本書が活用されることを願って序とします。

平成25年9月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 上原 訓 幸

## 例 言

- 1 本書は、前橋地家裁高崎支部庁舎耐震改修等工事に伴う、高崎城遺跡の発掘調査報告書である。書名「高崎城遺跡21」の「21」は調査次数を表し、この表記は群馬県教育委員会文化財保護課と高崎市教育委員会文化財保護課の協議により調整されたものである。
- 2 本書に掲載した高崎城(たかさきじょう)遺跡は、群馬県高崎市高松町26番地2に所在する。  
調査対象面積は、293m<sup>2</sup>である。
- 3 事業主体 東京高等裁判所(前橋地家裁高崎支部)
- 4 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 平成24年5月1日～平成24年5月31日
- 6 調査体制は次のとおりである。  
調査担当 齊藤利昭(上席専門員)  
遺跡掘削請負工事 スナガ環境測設株式会社  
委託 地上測量 アコン測量設計株式会社
- 7 整理事業の体制・期間は次のとおりである。  
平成25年度 整理期間 平成25年7月1日～平成25年7月31日  
整理担当 関 晴彦(専門調査役)
- 8 本書作成の担当は次のとおりである。  
編集 関 晴彦(専門調査役) デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員)  
執筆 第1章 坂口 一(資料課長)  
近世遺物観察表・第5章第1節出土陶磁器所見 大西雅広(上席専門員)  
金属製品観察表 関 邦一(補佐(総括))、他は関  
遺物写真撮影 佐藤元彦(補佐(総括))  
保存処理 関 邦一(補佐(総括))
- 9 出土遺物及び発掘調査に係わる資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 10 発掘調査並びに整理作業にあたり、下記の諸機関、諸氏にご教示、ご協力をいただいた。記して御礼申し上げます。  
(敬称略) 前橋地家裁高崎支部、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、清水 豊、秋本太郎

## 凡 例

- 1 本報告書の座標値は、世界測地系第11系である。1区北西隅付近の座標値は、次の通りである。

X=36224.767

Y=-74698.248

- 2 挿図中に示す方位記号は、座標北を示す。真北方向角は+0度29分33秒である。

- 3 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

第1図 高崎市都市計画図 昭和54年版に加筆。

第3図 国土地理院1/25,000地形図「下室田」平成14年版、「前橋」平成9年版、「富岡」平成6年版、「高崎」平成14年版

第4図 高崎市都市計画図 昭和54年版に、1～19次の調査区域を加筆。

第20図 『高崎市史資料集1 高崎城絵図』平成18年、1頁に加筆。

第21図 「No.17 御城破損之場所御願絵図」『高崎市史資料集1 高崎城絵図』平成18年、17頁の一部に加筆。

第22図 「No.40 テリ防木こく今度植候所絵図上ル控」『高崎市史資料集1 高崎城絵図』平成18年、45頁の一部に加筆。

第23図 『第一軍管地方迅速測図』「高崎」の一部に加筆。

第24図 『高崎城X 高崎城梅ノ木郭遺跡』高崎市遺跡調査会,1993、10頁に加筆。

- 4 本文中の火山噴出物(テフラ)の表記は、以下のとおりである。

As-A:浅間山A軽石 1783(天明3)年

As-B:浅間山B軽石 1108(天仁元)年

高崎泥流 1.1万年前頃

As-YP:浅間山板鼻黄色軽石 1.3万年前頃

# 目次

口絵	
序	
例言	
凡例	
第1章	調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第2章	調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第1節	調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第2節	調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第3章	遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第1節	遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第2節	歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第4章	検出された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第1節	概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第2節	1区の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第3節	2区の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第4節	3区の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
第5節	出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
遺物観察表	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
第5章	調査の成果とまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第1節	出土陶磁器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第2節	埋門・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
写真図版	
抄録	

# 挿 図 目 次

第1図	前橋地方家庭裁判所高崎支部の調査	1	第18図	出土遺物(10)瓦・陶磁器90～95	23
第2図	調査区の配置	3	第19図	出土遺物(11)金属製品96～101	24
第3図	調査地点の位置	5	第20図	高崎城 梅ノ木郭の位置	33
第4図	高崎城の既調査地点	6	『高崎市史資料集1 高崎城絵図』平成18(2006)年、1頁に加筆。		
第5図	1面全体図・2面全体図及び1区2面	9	第21図	高崎城 梅ノ木郭 埋門の位置(1)	34
第6図	2区上層断面	10	『No.17 御城破抵之場所御願絵図』享保12年9月		
第7図	2区-①2面東側(埋門付近)平面図	11	『高崎市史資料集1 高崎城絵図』平成18(2006)年、17頁の一部に加筆。		
第8図	3区2面	12	第22図	高崎城 梅ノ木郭 埋門の位置(2)	34
第9図	出土遺物(1)陶磁器1～13	14	『No.40 赤り防本こく今度結核所給図上小控』享保6年9月27日		
第10図	出土遺物(2)陶磁器14～25	15	『高崎市史資料集1 高崎城絵図』平成18(2006)年、45頁に加筆。		
第11図	出土遺物(3)陶磁器26～37	16	第23図	明治18年の高崎城跡	34
第12図	出土遺物(4)陶磁器38～46	17	『第一軍管地方迅速測図』「高崎」の一部に加筆。		
第13図	出土遺物(5)陶磁器47～55	18	第24図	高崎城第10次調査の調査区域	34
第14図	出土遺物(6)陶磁器56～64	19	『高崎城X 高崎城梅ノ木郭遺跡』高崎市遺跡調査会、1993、10頁に加筆。		
第15図	出土遺物(7)陶磁器65～73	20			
第16図	出土遺物(8)陶磁器74～82	21			
第17図	出土遺物(9)陶磁器83～89	22			

# 表 目 次

第1表	高崎城遺跡調査一覧	7
第2表	遺物観察表	25

# 写 真 目 次

Pl. 1	1区全景 北から	Pl. 6	2区-①東側 本杭・石出土状態 東から
	1区全景 東から	Pl. 7	3区全景 東上空から
Pl. 2	1区全景 北から		3区全景 西上空から
	1区 基本上層断面a-b 南から		3区全景 東から
	2区-①全景 北から		3区全景 西から
	2区-①西側全景 西から		3区全景 北から
	2区-①東側全景 東から		3区 西壁上層断面c-d 東から
Pl. 3	2区-①西側堀内 西壁基本上層断面a-b 東から	Pl. 8	2区埋門南堀 出土遺物-1
	2区-①東側 北西から	Pl. 9	2区埋門南堀 出土遺物-2
	2区-①東側堀内 上層断面g-h 東から	Pl. 10	2区埋門南堀 出土遺物-3
	2区-①東側埋門南堀上層 遺物出土状態 北から	Pl. 11	2区埋門南堀 出土遺物-4
Pl. 4	2区-②煉瓦とコンクリートの基礎1 東から	Pl. 12	2区埋門南堀 出土遺物-5
	2区-②煉瓦とコンクリートの基礎2 西から	Pl. 13	2区埋門南堀 出土遺物-6
	2区-①東側 梅ノ木郭埋門南堀南側 北から	Pl. 14	2区埋門南堀 出土遺物-7
	2区-①東側 梅ノ木郭埋門南堀南側 北東から	Pl. 15	2区埋門南堀 出土遺物-8、1区出土遺物
	2区-①東側 梅ノ木郭埋門南堀南側 北西から	Pl. 16	2区出土 金属製品・木杭
Pl. 5	2区-① 北壁基本上層断面c-d 南から		
	2区-①東側 梅ノ木郭埋門南堀 北東から		
	2区-②トレンチ 西から		
	2区-②トレンチ 南壁基本上層断面e-f 北から		
	2区-①東側 梅ノ木郭埋門南堀1 北から		
	2区-①東側 梅ノ木郭埋門南堀2 北から		
	2区-①東側掘削の底面 杭出土状態 東から		



## 第1章 調査に至る経過

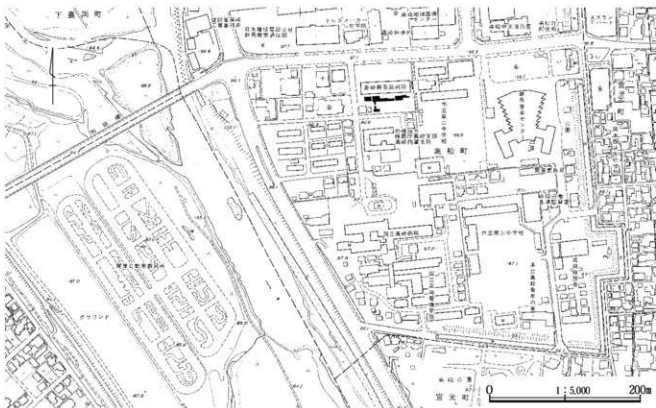
高崎城遺跡の発掘調査は、平成24年度前橋地家裁高崎支部庁舎耐震改修等工事に伴う事前の発掘調査である。平成23年12月5日、事業主体者である東京高等裁判所から群馬県教育委員会文化財保護課へ、同工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の試掘依頼があった。この依頼に対して、本事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地(高崎市遺跡番号02335：高松30遺跡)内にあることから、平成23年12月8日～9日、群馬県教育委員会文化財保護課による試掘調査が実施された。この試掘調査の結果、地表面下40cmの深さで煉瓦積み風の近代遺構が確認されるとともに、地表面下80～110cmの深さで堀の覆土が確認された。

この堀跡の位置を高崎城縄張り図と照合したところ、高崎城本丸の東側に位置する梅ノ木郭を囲む堀の南辺側の堀であることが確認され、さらにこの堀に付随する張出状の埋門に関連する造作の存在も予想された。このことから、本事業地については本調査が必要で、調査期間は平成24年5月1日～平成24年5月31日の1か月間との判

断が下された。

この県文化財保護課による試掘調査結果と調整を受けて、平成24年2月16日に東京高等裁判所、県文化財保護課、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、耐震改修工事を受注した施工業者の四者で、発掘調査に係わる事前の具体的な方法の協議が行われた。一方、平成24年4月11日、東京高等裁判所から県文化財保護課へ同事業地の発掘調査の依頼があり、同課による発掘調査の調整が行われた。

この調整結果に基づいて、平成24年4月17日、再び東京高等裁判所、県文化財保護課、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の三者で、発掘調査に係わる具体的な方法の協議が行われ、東京高等裁判所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で、平成24年5月1日付けの埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、同事業団で発掘調査を実施するに至った。



第1図 前橋地方家庭裁判所高崎支部の調査(黒塗り)

## 第2章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

#### 1 記録

調査対象区域の掘削可能範囲内で、舗装撤去及び工事境界杭の設置を施工業者が終了したのちに、重機を使用して1区から表土掘削を開始した。埋設物が多く存在することが予想されたため、慎重に掘削を進め、遺構確認ののち掘り下げて遺構状況を把握し、掘り下げ限界まで、その都度記録写真を撮影し、全体の状況が把握できた段階で全景写真を撮影した。また、平面測量を業者に委託して記録するとともに、土層の堆積状態の断面図を作成した。

#### 写真記録

デジタルカメラ(1000万画素)によるカラー写真撮影。  
6×7フィルムカメラ(プロローニフィルム)によるモノクロ写真撮影。

#### 図面記録

デジタル平板による平面図。原則として縮尺1/20。調査区域等の測量も含む。

手実測による断面図。原則として縮尺1/20。後日、デジタルトレースにより電子化。

#### 2 調査区の設定

調査対象区域は、耐震設備設置箇所及び受水槽移設先、配電ケーブル切り直し範囲を対象とした。第2図のように、全体を3つの区画に分け、さらに内部を分割して地区名称を付した。分割される工事箇所それぞれ次のような調査区名称を付した。

- 1区:受水槽設置箇所
- 2区-①:西側耐震設備設置箇所
- 2区-②:埋設ケーブル敷設箇所
- 3区:東側耐震設備設置箇所

### 第2節 調査の経過

#### 1 日誌抄録

以下、日誌より調査経過を記す。

**5月1日(火)** 工事業者と打合せをする。請負掘削業者・重機業者と打ち合わせる。

**5月7日(月)** 1区掘削を開始したが、攪乱が多く、遺構なし。2区-②掘削開始。

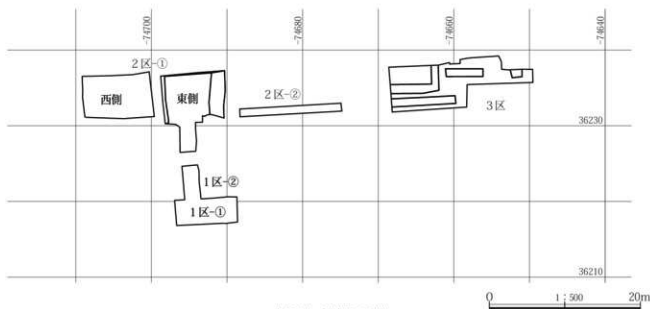
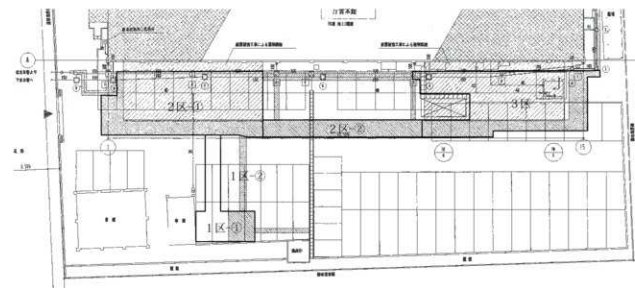
**5月8日(火)** 1区全景撮影。2区堀跡人力掘り下げを進める。



1区の表土掘削



2・3区の調査 東から



第2図 調査区の配置



2区-②の調査



土層断面図の作成

## 第2章 調査の方法と経過

**5月9日(水)** 曇りのち雨。2区-①人力掘り下げを進める。堀跡南法面検出。

**5月10日(木)** 2区-①堀跡南法面埋没土中から陶磁器が出土する。2区-②重機掘削を進めたところ、煉瓦積み基礎を確認。

**5月11日(金)** 2区全景写真撮影。煉瓦積み基礎の測量。

**5月14日(月)** 「埋門」精査。2区-②及び3区掘削。

**5月15日(火)** 雨。2区-①深く掘り下げて底面を探る。3区重機掘削を進める。

**5月16日(水)** 3区人力掘り下げ・遺構確認を進める。2区基本土層を記録する。

**5月17日(木)** 3区全景写真撮影。土層断面記録。調査ほぼ終了。埋め戻し準備。

## 第3章 遺跡の位置と歴史的環境

### 第1節 遺跡の位置

高崎城遺跡は旧高崎市街地中心部にあり、高崎台地と呼ばれる平坦な地形の西端に位置する。高崎台地は約21万年前に発生した浅間山の爆発に伴う前橋泥流と、約1.1万年前に発生した高崎泥流で形成され、その西端は烏川によって浸食された崖となっている。高崎城遺跡は烏川左岸の崖上にある。

北側・東側・南側の三方向を堀に囲まれた内部は、現在群馬音楽センターや市役所等の公共機関の建物が建ち並ぶ区域となっている。

### 第2節 歴史的環境

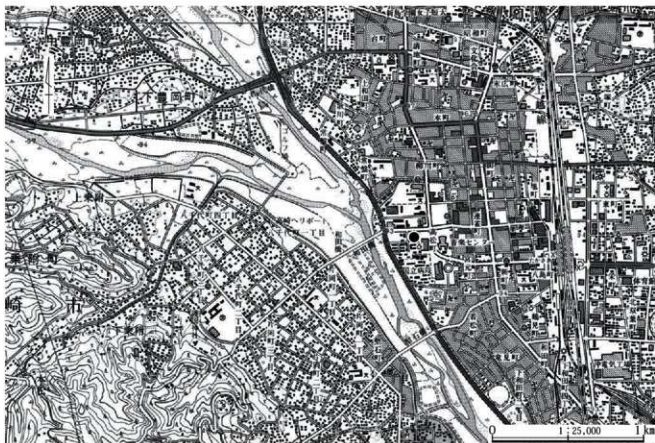
旧高崎市の区域では、烏川左岸にある弥生時代中期後

半の標識遺跡である竜見町遺跡や高崎競馬場遺跡が古くから知られ、近年では古墳時代～平安時代の遺構・遺物も発見されている。以下、明治維新以降の高崎城を中心に記す。

高崎城遺跡の範囲には、かつて中世には和田城があったことが記録されているが、具体的な城郭の様子は不明である。和田城は1598年(慶長3年)の高崎城築城によってその内部に取り込まれ、その一部が高崎城西郭とされてきた(山崎1978)。XV次調査で西郭が調査され、和田城櫓台とされていた盛土は、1582年(天正10年)以降の造成であると推定された。

明治維新後、

1871年(明治4年) 県庁となる。



第3図 調査地点の位置

### 第3章 遺跡の位置と歴史的環境

1872年(明治5年) 陸軍兵営となる。東京鎮台高崎分営設置。内堀が埋められる。

1875年(明治8年) 歩兵第三連隊第一大隊が置かれる。

1884年(明治17年) 歩兵第十五連隊が置かれる。

などの変遷を重ね、第二次大戦後は官庁として利用され、現在もその利用状況が続いている。

ここでは、調査対象区域が高崎城遺跡の内部にあると想定されていることから、高崎城遺跡の調査歴を記して、今回の調査の位置付けの一助としたい。この調査一覧(第1表)は、『高崎城遺跡19』に掲載された一覧表の抜粋である。

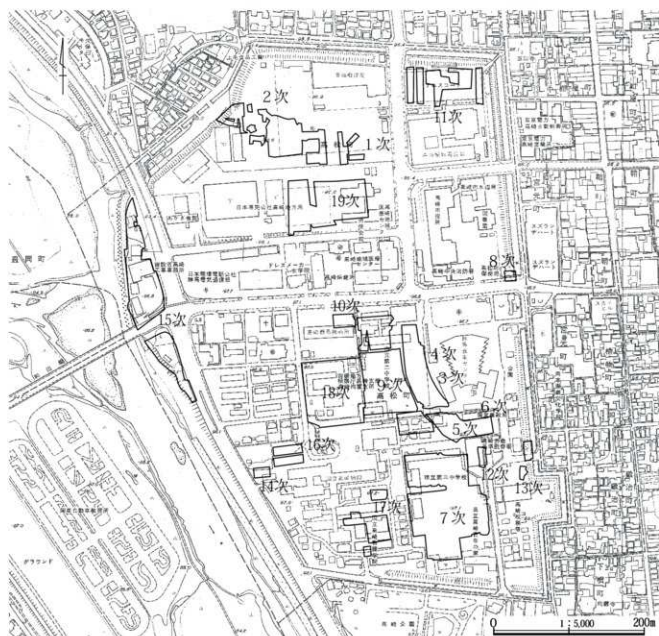
【参考文献】

『群馬県史』資料編2,1986

『高崎城XV遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第369集,2006

山崎一『群馬県古城原址の研究』下巻 群馬県文化事業振興会,1978

『高崎城遺跡19』高崎市教育委員会,2010



第4図 高崎城の既調査地点

第1表 高崎城遺跡調査一覧

調査次	調査年	調査原因	文献
1次	昭和60年	高松中学校校舎建設	1
2次	昭和61年	高松中学校校庭築造	2
3次	昭和63年	都市計画道路高崎駅西口線築造	3
4次	昭和63年～平成元年	都市計画道路高崎駅西口線築造	3
5次	平成元年～2年	都市計画道路高崎駅西口線築造	3
6次	平成元年	群馬シンフォニーホール建設	4
7次	平成2年	高崎市役所新庁舎建設	5
8次	平成2年	高松郵便局建替	6
9次	平成3年	高崎市役所(高崎シティギャラリー)建設	5
<b>10次</b>	<b>平成3年</b>	<b>前橋地方家庭裁判所高崎支部構内建物増築</b>	<b>7</b>
11次	昭和63年	市営高松地下駐車場・友好姉妹都市公園建設	8
12次	平成5年	都市計画道路高松若松線改築	9
13次	平成5年	城址公園公衆便所建設	9
14次	平成8年	国立高崎病院(当時)研修棟建設	10
15次	平成14年	国道17号(高松立体)改築	11
16次	平成15年	国立高崎病院(当時)仮設病棟建設	12
17次	平成17年	国立病院機構高崎総合医療センター建設	13
18次	平成20～21年	高崎法務総合庁舎建設	
19次	平成20～21年	高崎市医療保険センター(仮称)・新図書館建設	14
20次	平成23年	前橋地方検察庁高崎法務総合庁舎建て替え工事	15
<b>21次</b>	<b>平成24年</b>	<b>前橋地方家庭裁判所高崎支部庁舎耐震改修等工事</b>	<b>本書</b>

[文獻] とくに記述のない限り、高崎市教育委員会による。

『群馬県史』資料編2, 1986

- 『高崎城跡』, 1985
- 『高崎城遺跡Ⅱ 榎部並びに三ノ丸北西部』高崎市文化財調査報告書81集, 1988
- 『高崎城遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ』高崎市107集, 1990
- 『高崎城Ⅵ 三ノ丸遺跡』高崎市104集, 1990
- 『高崎城Ⅶ・Ⅷ 高崎城三ノ丸遺跡』高崎市129集, 1994
- 『高崎城Ⅷ(追手門)遺跡』高崎市121集, 1992
- 『高崎城Ⅹ 高崎城梅ノ木郭遺跡』高崎市遺跡調査会, 1993
- 『高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告書』高崎市93集, 1989
- 『高崎城Ⅻ・Ⅼ』高崎市131集, 1997
- 『高崎城Ⅾ遺跡』高崎市57集, 1997
- 『高崎城Ⅿ遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第369集, 2006
- 『高崎城ⅰ遺跡』高崎市193集, 2003
- 『高崎城ⅱ遺跡』高崎市206集, 2006
- 『高崎城遺跡19』高崎市259集, 2010
- 『高崎城遺跡20』高崎市312集, 2013

## 第4章 検出された遺構と遺物

### 第1節 概要

高崎城遺跡はもとNTT群馬支社付近を本丸とし、その東側に梅ノ木郭が連なり、両者を囲む内堀が巡っていたと推定されている。本丸の北側に榎郭、西側に西の丸があり、本丸の東側は二の丸となり、梅ノ木郭は二の丸の内側に相当する。二の丸を囲むように堀があり、その外側を三の丸が囲む。三の丸を囲む堀が、現在見られる堀で、土塁とその外側の水を湛えた堀が良く残っている。本丸を囲む堀、二の丸を囲む堀は埋められて、現在みることはできない。

今回の調査区域は本丸の東側に連なる梅ノ木郭の内部と、その南側にある堀の境界付近に相当する。梅ノ木郭は北側に梅ノ木門があって二の丸につながるが、南側に「埋門」と呼ばれる施設があり、通常は架橋されていないが必要な場合は跳ね橋または滑り出しの橋が架けられたと考えられる場所である。今回の調査では、堀跡と堀南側の埋門跡(基礎になる土台)を検出したと考えられる。

### 第2節 1区の調査(第5図、PL. 1・2)

1区は調査対象区域の南端の区域である。地表下約20cmで基盤(地山と呼ぶ)となる高崎泥流が確認できた。1区ではビニールが入ったり、近代・現代の土管が埋設されていたりと、大半が攪乱されており、高崎城遺跡に関連する遺構は検出されず、記録をとって埋め戻した。

### 第3節 2区の調査(第5～7図、PL. 2～6)

2区は西端部の2区-①と東側の2区-②とに分けられる。

#### 1 2区-①西側

2区-①は既存の水道・電気等の配管のほか、用途不明の埋設管が表土下で確認され、部分的な調査に限られた。2区西端部では、部分的であるが梅ノ木郭南側の堀痕跡を検出した(第6図a-b)。最下層の5は黒色土で炭

化物を多く含み、瓦片を多く含んでいた。

#### 2 2区-①東側

2区-①の東側(2区全体では中央部に相当する)では中央部にケーブルが敷設され、調査区域は南北に二分される状態となった。表土下には何枚もの薄付き固められた版築土層がみられ、それらの中に旧陸軍第十五連隊関連の構築物が所々に認められたことから、堀の上に構築された建物の地盤強化を施した版築土と考えられる。

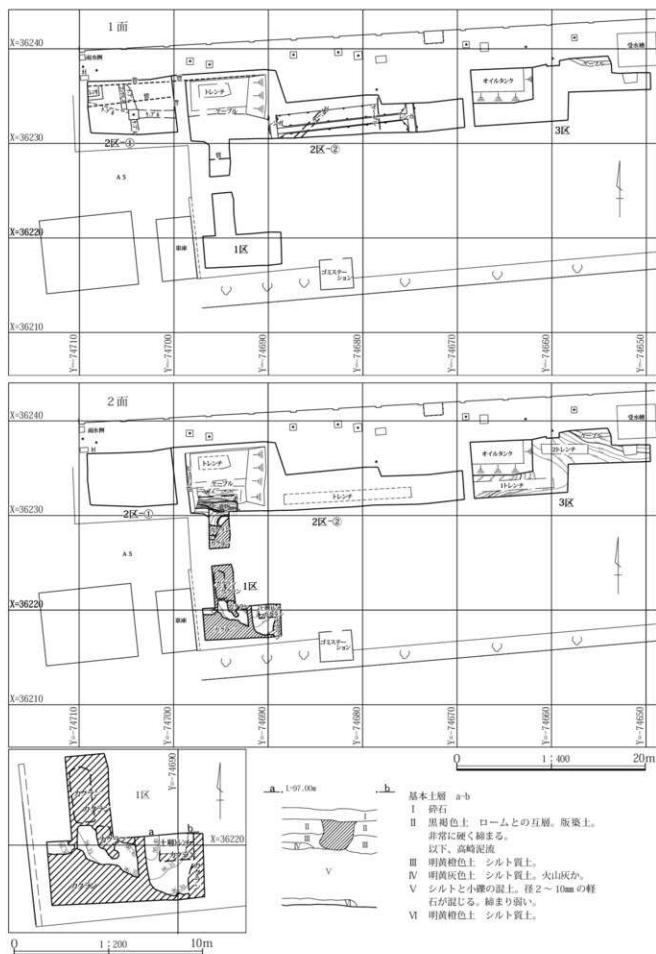
その下位の調査では、調査区域南端部で梅ノ木郭の縄張図にある張出部の立ち上がりとみられる地山面を検出した。埋没土には炭化物や基盤層の高崎泥流が混じる土が堆積し、埋没土中から明治時代の陶磁器がまとまって出土した。また、補足調査した埋門裾部からはガラス破片が出土し、明治期に堀の埋め立てが行われたことが判明した。

2区-①東側の本館寄りの区域にトレンチを設定して、堀の底面及び埋門北側張出部の確認を試みた。湧水があったこと、建物や作業の安全が確保できない可能性があり、堀底面の検出には至らなかった。

#### 3 梅ノ木郭南側の埋門

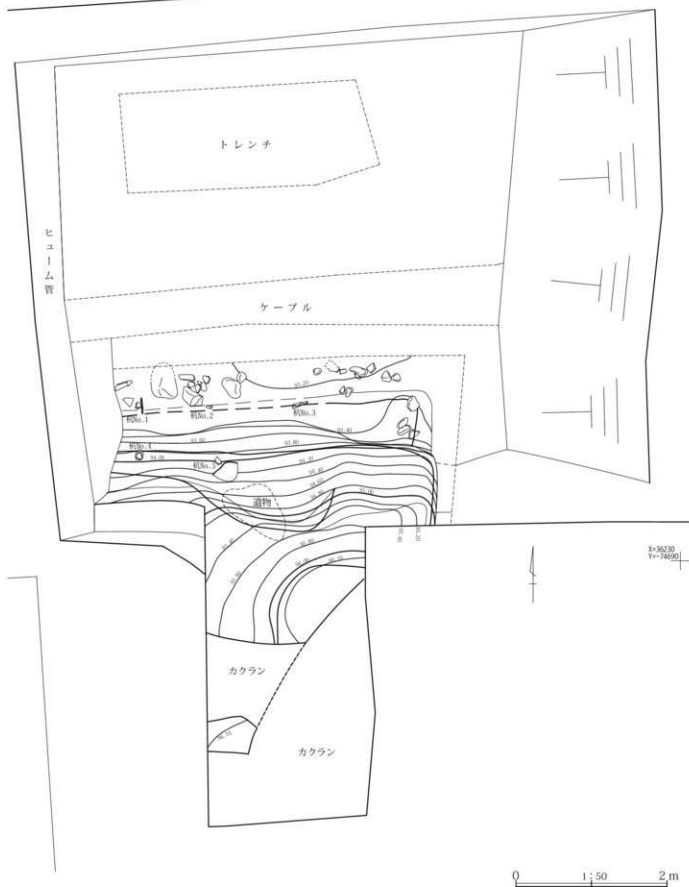
2区-①東側区域の南寄り、梅ノ木郭南側の堀の南壁(南側張出部)とみられる斜面を検出した(第6図k-l)。頂部は攪乱によって破壊されていたが、北西方向も削られて狭くなっていた。直上の埋没土から陶磁器が出土した。斜面の長さは3.5mで、頂部からの深さは約3mである。斜面裾に幅70cm前後の平坦面が作られ、杭が裾に沿って3本並んで打ち込まれていた(第7図)。この平坦面から北側にかけて、10～50cm大の石が不規則に出土しており、石組み遺構が崩落した可能性がある。平坦面から北側の石の下位はさらに低くなっており、掘り下げることができたが、上位に存在する埋設管を保護するため、下部への掘り下げを断念した。





第5図 1面全体図・2面全体図及び1区2面





第7図 2区-①2面東側(埋門付近)平面図

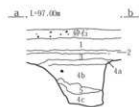
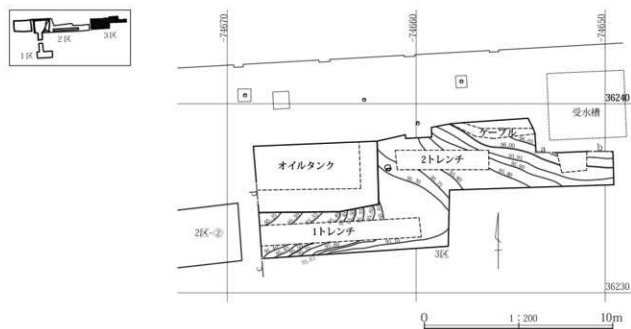
4 2区-②

陸軍第十五連隊時代の建物の一部とみられる、コンクリート基礎に煉瓦積みの構築物を検出した。この構築物を撤去したのち、下に掘り下げて、梅ノ木郭南側の堀埋没土の堆積状態を確認した(第6図e-f)。

第4節 3区の調査(第5・8図、PL. 7)

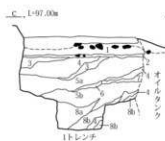
3区は東寄りの区域である。調査区域のなかにオイルタンクや受水槽があるほか、本館側(北側)に埋設管等があるなど、調査可能な範囲が狭小である。安全上の都合により、調査範囲はクランク状となり、堀底面の検出まで至らなかった。

3区1トレンチは、部分的に深さ約2mまで掘削し、堆積状態を確認した。土層断面の最低部は、堀底面ではない。埋没土は南下がりに深くなる状態であった。



基本土層 a-b

- 1 暗褐色土 高崎泥流、小礫をわずかに含む。
- 2 灰黄褐色土 高崎泥流と灰褐色土が薄く重なる。
- 3 くすんだ褐色土 高崎泥流に暗褐色土が混じる。
- 4a 明黄褐色土 高崎泥流主体、非常に硬く締まる。
- 4b 明黄褐色土 小礫を含む。4a層より締まり強い。
- 4c 明黄褐色土 4a層よりシルト質。
- 5 明黄褐色土 暗褐色土をわずかに含む。



0 1:80 2m

第8図 3区2面

層 c-d

- 1 くすんだ褐色土 高崎泥流小ブロック・暗褐色土を含む。小礫を含む。硬く締まる。
- 2 明黄褐色土 高崎泥流と灰褐色土が薄く重なる。小礫・砂を含む。
- 3 暗黄褐色土 高崎泥流と暗褐色土ブロックの混土。締まっている。
- 4 灰褐色土 高崎泥流ブロックを少量含む。小礫を含む。
- 5a 明黄褐色土 高崎泥流主体。礫を含む。
- 5b 明黄褐色土 5aより礫少ない。褐色土ブロックを少量含む。
- 6 黄褐色土 高崎泥流、砂を含む。
- 7 明黄褐色土 高崎泥流ブロック主体。
- 8a くすんだ黄褐色土 砂質。礫砂を含む。左下がりに薄く重なって堆積。
- 8b くすんだ黄褐色土 砂質。礫砂を含む。

## 第5節 出土遺物(第9～19図、PL. 8～16)

ここでは1～3区出土遺物の概要を記す。

主な出土遺物は2区-①東側の埋門出土の陶磁器である。1は製作地不詳の湯飲み、2～5は丸碗である。7～35は32を除き瀬戸・美濃系の磁器で、端反碗である。37は井、38～82は瀬戸・美濃系の磁器で、文様・モチーフの良く似た皿である。83・84は陶器皿である。86は白磁皿製作地不詳である。87は洋皿である。88は製作地不詳の行平か鍋の陶器蓋である。外面中央の摘み内に「第一中隊曹長室用」と黒で書かれている。89も製作地不詳で、陶器土瓶である。

90から93は瓦で、92は瓦頭面の文様がほぼ判明する。

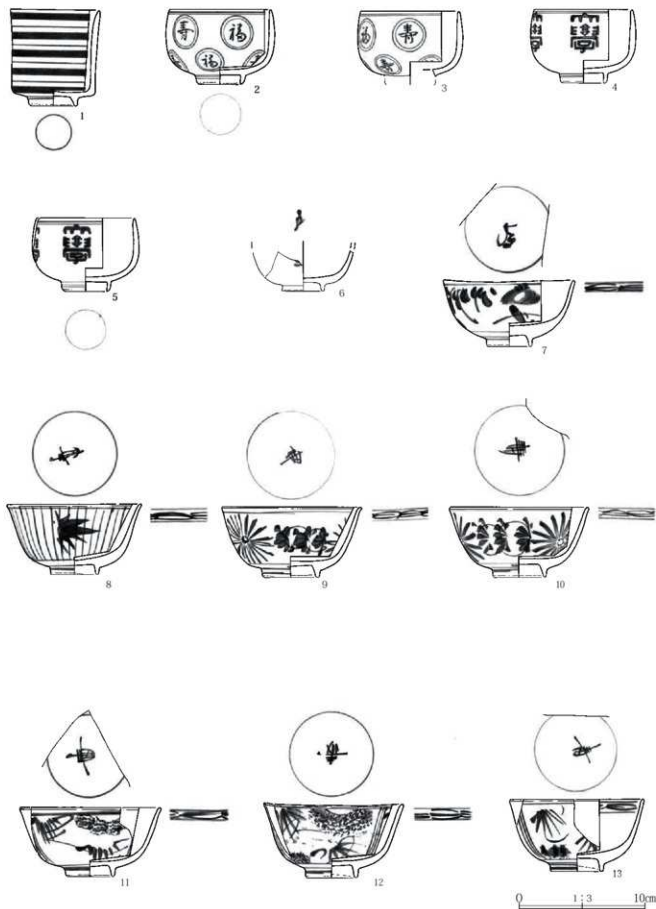
94は1区出土の丸碗で、掲載可能なものはこの1点である。製作地不詳の磁器である。95は3区出土の白磁皿

で、やはり掲載可能な遺物はこの1点である。

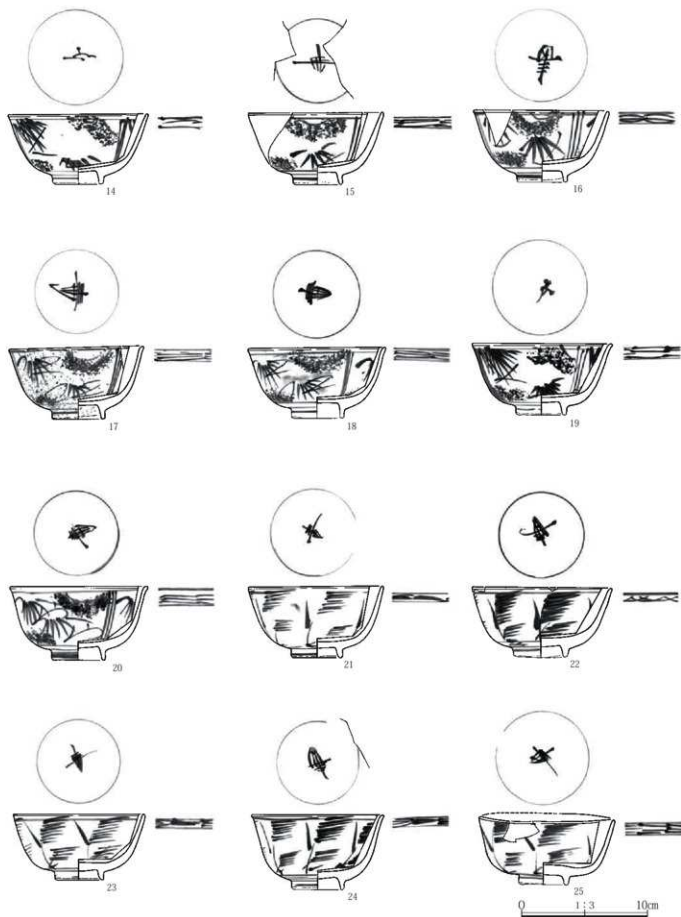
96から101はすべて2区出土の金属製品である。96は雁首を欠くキセルで、中央のラウ部は全体に鉄錆色を呈する。97と98は鉄釘とみられ、2区-①東側の埋門中段から出土した。98は木質が付着している。99は断面円形の針金状の銅製品で、一部を欠く。100は円盤状の縁が直立する金具で、襖の引手のような形状である。101は釘か。

102は2区-①東側底面出土の木杭である(PL.16)。長さ112cm、中央部付近の径6cmほどで、先端部を鋭利な刃物で尖らせている。先端部は焼いているようである。樹種はクリである。

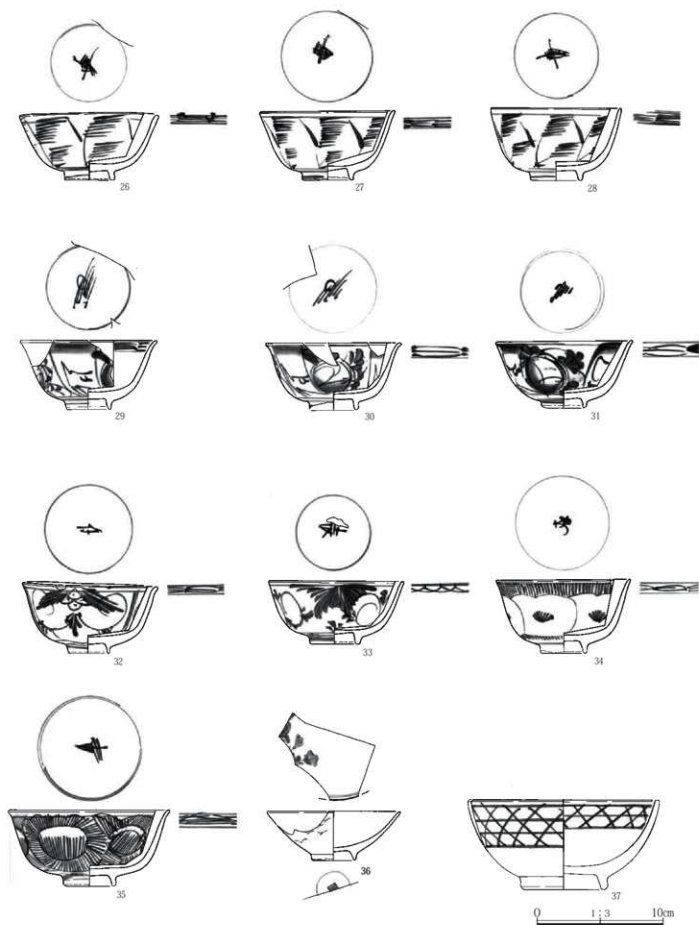
個別の遺物の詳細は、観察表に記した。



第9図 出土遺物(1)陶磁器1～13

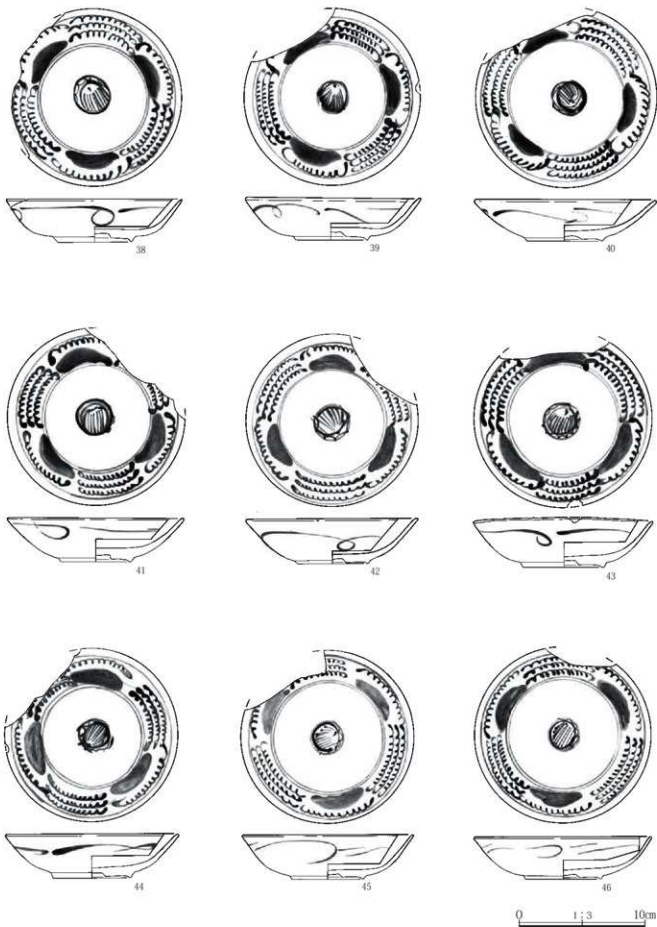


第10圖 出土遺物(2)陶磁器14～25

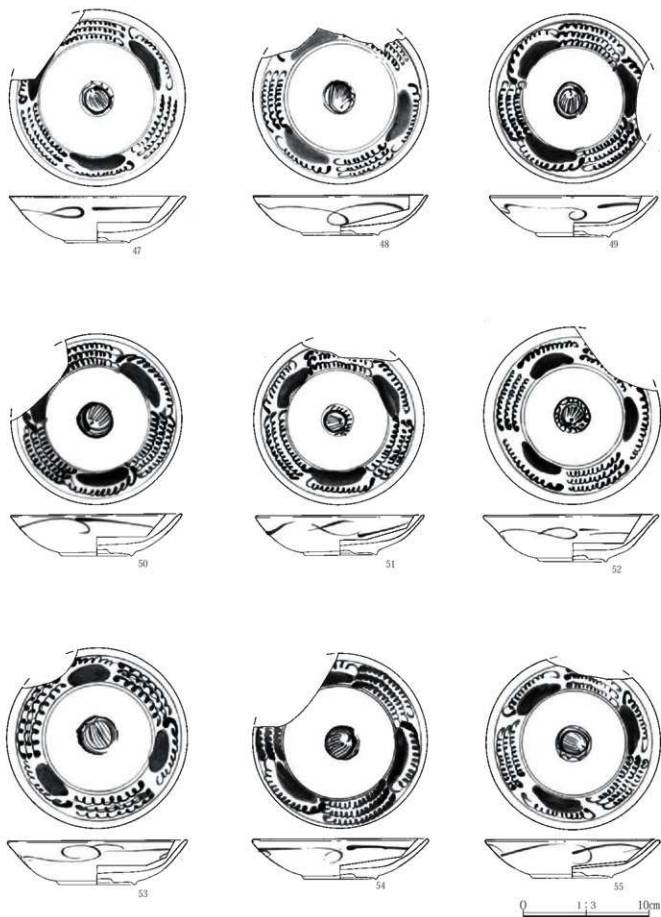


第11図 出土遺物(3)陶磁器26～37

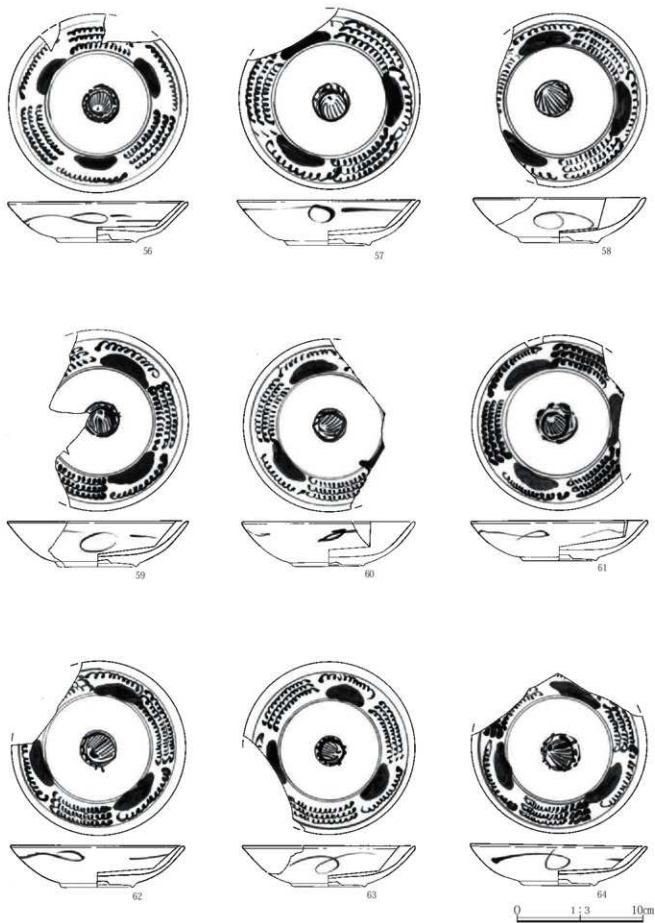




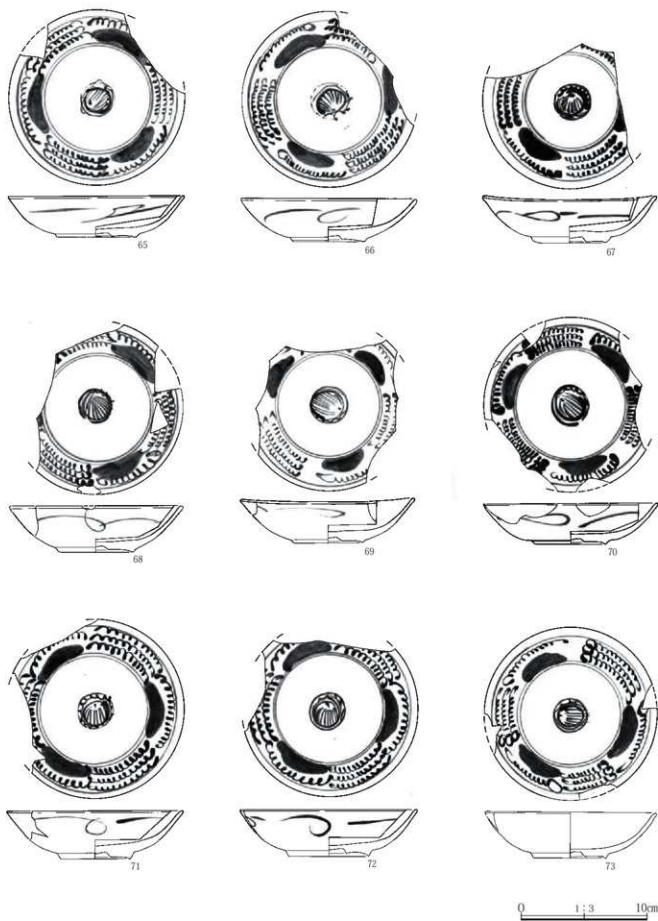
第12圖 出土遺物(4)陶磁器38～46



第13図 出土遺物(5)陶磁器47～55

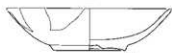


第14圖 出土遺物(6)陶磁器56～64



第15図 出土遺物(7)陶磁器65～73

0 1:3 10cm



74



75



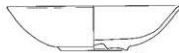
76



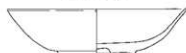
77



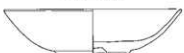
78



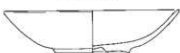
79



80



81

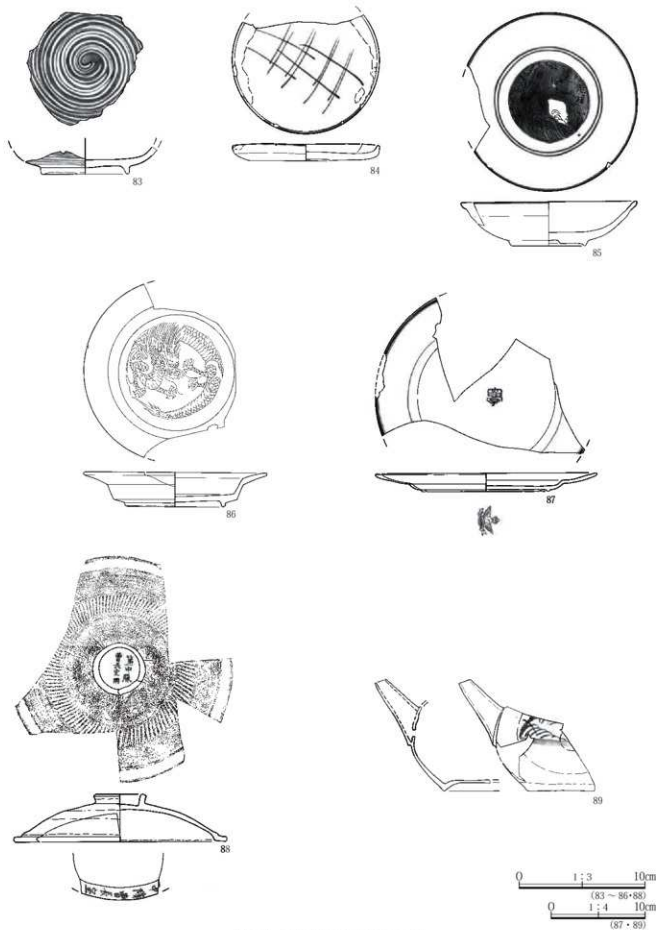


82

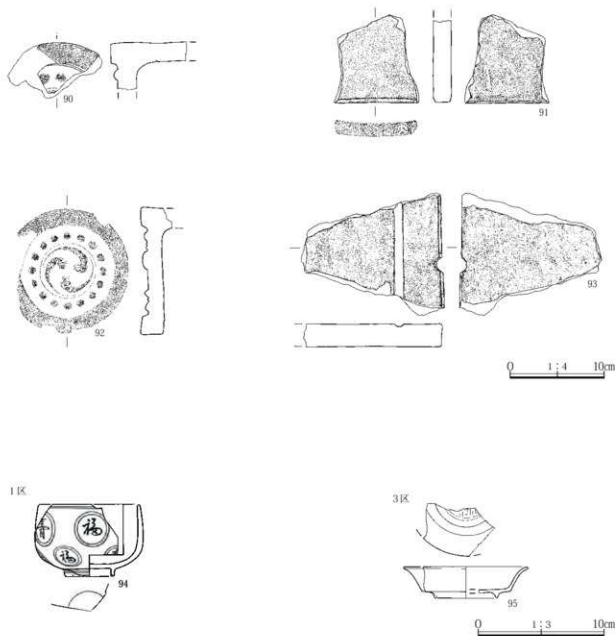
0 1:3 10m

第16圖 出土遺物(8)陶磁器74～82

第4章 検出された遺構と遺物

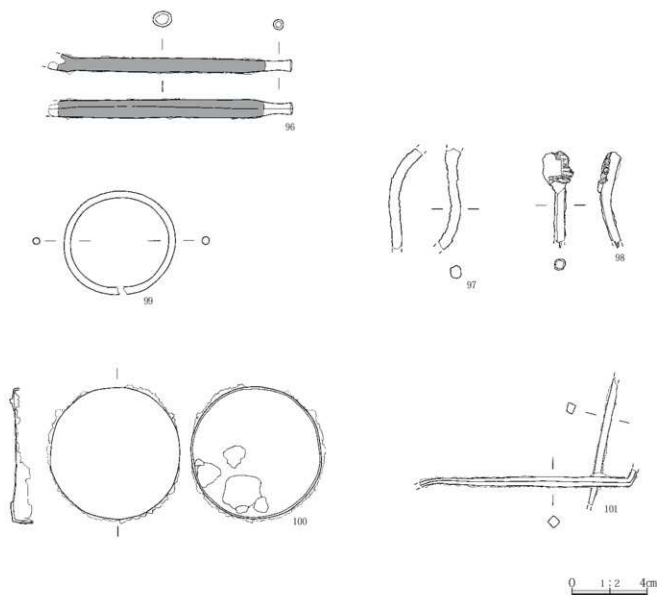


第17図 出土遺物(9)陶磁器83～89



第18図 出土遺物(10)瓦・陶磁器90～95

第4章 検出された遺構と遺物



第19図 出土遺物(11)金属製品96～101



第2表 遺物観察表

No.	排 列 No.	種 類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
1	第98PL.8	製作地不詳 磁器 蓋蓋み	宮区埋門中段 口縁部から体部 一部欠	L1 7.0 底 3.6	高 7.6	白//	体部はゆるく外反。外面は幅広と細線を交互に描く。高台内 縁は1重淵線。	近現代。
2	第98PL.8	製作地不詳 磁器 丸碗	宮区埋門中段 口縁部から体部 一部欠	L1 7.9 底 3.4	高 5.9	白//	口縁部外面と高台外面。高台内縁線は染付による細い淵線。外 面淵線。2重丸付蓋。「寿」字文を散らす。高台端部外面は 斜めに削る。高台内縁線は1重淵線。貝須はやや凹味を帯びる。	近現代。
3	第98PL.8	製作地不詳 磁器 丸碗	宮区埋門中段 2/1	L1 7.8 底 -	高 -	白//	口縁部外面と高台外面。高台内縁線は染付による細い淵線。外 面淵線。2重丸付蓋。「寿」字文を散らす。高台端部外面は 斜めに削る。高台内縁線は1重淵線。貝須はやや凹味を帯びる。	近現代。
4	第98PL.8	製作地不詳 磁器 丸碗	宮区埋門中段 口縁部から体部 1/2欠	L1 3.5 底 3.5	高 5.8	白//	口縁部外面と高台外面。高台内縁線は染付による細い淵線。口 縁部から体部外面の4方に青色土絵具による「大」字。文字は 濃い緑取り内の色が薄く、ゴム印版であろう。高台端部外面は 斜めに削る。	近現代。
5	第98PL.8	製作地不詳 磁器 丸碗	宮区埋門中段 口縁部3/4欠	L1 7.8 底 3.4	高 5.8	白//	口縁部外面と高台外面。高台内縁線は染付による細い淵線。口 縁部から体部外面の4方にコバルトブルーの土絵具による「大 」字。高台端部外面は斜めに削る。	近現代。
6	第98PL.1	瀬戸・美濃 磁器か 磁	宮区埋門中段 底部	L1 - 底 3.3	高 -	白//	底部内面に不明文様。体部外面に染付一部残る。貝須は酸化コ バルトか。	19世紀中頃か。
7	第98PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 磁反碗	宮区埋門中段 口縁部から体部 3/4欠	L1 10.3 底 3.6	高 5.2	白//	口縁部歪む。外面は簡略化した植物文。口縁部内面は簡略化し た文様帯。底部内面は1重淵線内に不明文様。貝須は酸化コ バルト。	近代。
8	第98PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 磁反碗	宮区埋門中段 口縁部一部欠	L1 10.6 底 3.8	高 5.5	白//	外面は縦格子地文にカエド文を3方に配す。口縁部内面は簡 略化した文様帯。底部内面は1重淵線内に附れた「寿」字文。貝 須は酸化コバルトか。	近代。
9	第98PL.8	瀬戸・美濃 磁器 磁反碗	宮区埋門中段 口縁部1/3欠	L1 10.1 底 11.0 4.4	高 5.5	白//	口縁部歪む。外面に唐草文。唐草文は蔓部分と花部分セット で3方に配す。蔓部分の下部に格子状文。口縁部内面は簡略 化した文様帯。底部内面は1重淵線内に附れた「寿」字文。貝 須は酸化コバルト。	近代。
10	第98PL.8	瀬戸・美濃 磁器 磁反碗	宮区埋門中段 口縁部から体部 1/2欠	L1 - 底 -	高 5.8	白//	口縁部歪む。外面に唐草文。唐草文は蔓部分と花部分セット で3方に配す。蔓部分の下部に格子状文。口縁部内面は簡略 化した文様帯。底部内面は1重淵線内に附れた「寿」字文。貝 須は酸化コバルト。	近代。
11	第98PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 磁反碗	宮区埋門中段 口縁部から体部 一部欠	L1 11.0 底 3.6	高 5.4	白//	外面は3条の縦線3組で区切った中に世状文を3方に配す。口 縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重淵線内に附れた 「寿」字文。貝須は酸化コバルト。	近代。
12	第98PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 磁反碗	宮区埋門中段 口縁部1/4欠	L1 11.0 底 4.0	高 5.7 5.9	白//	外面は3条の縦線3組で区切った中に世状文を3方に配す。口 縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重淵線内に附れた 「寿」字文。貝須は酸化コバルト。	近代。
13	第98PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 磁反碗	宮区埋門中段 口縁部一部、底 部欠	L1 10.5 底 4.1	高 5.7	白//	外面は3条の縦線3組で区切った中に世状文を3方に配す。口 縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重淵線内に附れた 「寿」字文。貝須は酸化コバルト。	近代。
14	第108PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 磁反碗	宮区埋門中段 口縁部1/5欠	L1 11.0 底 3.9	高 5.4	白//	外面は3条の縦線3組で区切った中に世状文を3方に配す。口 縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重淵線内に不明 文様。貝須は酸化コバルト。	近代。
15	第108PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 磁反碗	宮区埋門中段 1/2	L1 10.6 底 3.6	高 5.7	白//	外面は3条の縦線3組で区切った中に世状文を3方に配す。口 縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重淵線内に附れた 「寿」字文。貝須は酸化コバルト。	近代。
16	第108PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 磁反碗	宮区埋門中段 口縁部から体部 1/2欠	L1 10.6 底 4.0	高 5.6	白//	外面は3条の縦線3組で区切った中に世状文を3方に配す。口 縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重淵線内に附れた 「寿」字文。貝須は酸化コバルト。	近代。
17	第108PL.8	瀬戸・美濃 磁器 磁反碗	宮区埋門中段 口縁部1/4欠	L1 10.3 底 10.7 4.2	高 5.5 5.7	白//	外面は3条の縦線3組で区切った中に世状文を3方に配す。口 縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重淵線内に附れた 「寿」字文。高台内に突き出た貝須を帯びず。貝須は酸化コ バルト。口縁部端部1部割れ。	近代。
18	第108PL.8	瀬戸・美濃 磁器 磁反碗	宮区埋門中段 口縁部から体部 1/2欠	L1 10.9 底 4.1	高 5.5	白//	底部器型は薄い。外面は3条の縦線3組で区切った中に世状文 を3方に配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1 重淵線内に附れた「寿」字文。	焼成不良。近 代。
19	第108PL.8	瀬戸・美濃 磁器か 磁反碗	宮区埋門中段 口縁部一部欠	L1 11.0 底 4.0	高 5.6	灰白//	外面は3条の縦線3組で区切った中に世状文を3方に配す。口 縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重淵線内に不明 文様。貝須は酸化コバルト。	焼成不良。近 代。
20	第108PL.9	瀬戸・美濃 磁器か 磁反碗	宮区埋門中段 口縁部1/4欠	L1 10.6 底 11.0 4.1	高 5.8	白//	外面は3条の縦線3組で区切った中に世状文を3方に配す。口 縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重淵線内に附れた 「寿」字文。	近代。
21	第108PL.9	瀬戸・美濃 磁器か 磁反碗	宮区埋門中段 口縁部一部欠	L1 10.7 底 4.0	高 5.6	灰白//	秋草状文を7カ所配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底 部内面は1重淵線内に附れた「寿」字文。貝須は酸化コバルト。 素地は白くなく。不明な貫入が入る。	焼成不良。近 代。

## 第4章 検出された遺構と遺物

No.	排 出 Pl. No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
				口 径	高 度			
22	第10階 Pl. 8	瀬戸・美濃 磁器か 陶反碗	Ⅱ区埋門中段 口縁部一部欠	口 11.0 底 4.2	高 5.5	白//	外面に秋草文を7方所配し、高台縁に円形文と縦線状文を2方所つ配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重線帯内に附れた「寿」字文。呉須は強化コバルト。不規則な貫入が入る。	やや焼成不良。 近代。
23	第10階 Pl. 9	瀬戸・美濃 磁器か 陶反碗	Ⅱ区埋門中段 口縁部一部欠	口 10.2 底 10.5 3.9	高 5.2	白//	秋草文を7方所配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重線帯内に附れた「寿」字文。呉須は強化コバルト。	近代。
24	第10階 Pl. 9	瀬戸・美濃 磁器か 陶反碗	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/2欠	口 10.4 底 4.0	高 5.9	白//	口縁部歪む。秋草文を7方所配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重線帯内に附れた「寿」字文。呉須は強化コバルト。	近代。
25	第10階 Pl. 8	瀬戸・美濃 磁器 陶反碗	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/2欠	口 10.7 底 11.0 4.0	高 5.2 5.4	白//	高台縁に歪みがあり、口縁部が傾く。外面に秋草文を7方所配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重線帯内に附れた「寿」字文。呉須は強化コバルト。	近代。
26	第11階 Pl. 9	瀬戸・美濃 磁器か 陶反碗	Ⅱ区埋門中段 口縁部一次	口 10.2 底 11.1 3.8	高 5.0 5.3	白//	口縁部歪む。外面に秋草文を7方所配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重線帯内に附れた「寿」字文。呉須は強化コバルト。	近代。
27	第11階 Pl. 9	瀬戸・美濃 磁器か 陶反碗	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/3欠	口 10.6 底 4.0	高 5.4	灰白//	底部器壁薄く、外面に秋草文を7方所配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重線帯内に附れた「寿」字文。呉須は強化コバルト。不規則な貫入が入る。	焼成不良、近代。
28	第11階 Pl. 9	瀬戸・美濃 磁器か 陶反碗	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/3欠	口 10.3 底 4.0	高 5.7	灰白//	外面に秋草文を7方所配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重線帯内に附れた「寿」字文。呉須は強化コバルト。	やや焼成不良。 近代、近代。
29	第11階 Pl. 9	瀬戸・美濃 磁器か 陶反碗	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/4欠	口 (10.7) 底 3.6	高 5.4	白//	外面は簡略化した蔓草文か。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重線帯内に不明文様。呉須は強化コバルト。	近代。
30	第11階 Pl. 9	瀬戸・美濃 磁器か 陶反碗	Ⅱ区埋門中段 口縁部から体部 1/4欠	口 10.7 底 3.8	高 5.3	白//	外面は簡略化した蔓草文か。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重線帯内に不明文様。呉須は強化コバルト。	近代。
31	第11階 Pl. 9	瀬戸・美濃 磁器 陶反碗	Ⅱ区埋門中段 口縁部一部欠	口 10.7 底 3.4	高 5.3	白//	外面は簡略化した蔓草文か。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は2重線帯内に不明文様。呉須は強化コバルト。	近代。
32	第11階 Pl. 9	製作地不詳 磁器 陶反碗	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/3欠	口 10.7 底 3.2	高 5.3 5.6	白//	外面は2条の縦線で3方所に区切り、その中に唐草状文様を配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重線帯内に不明文様。全面に貫入が入る。	やや焼成不良。 近代。
33	第11階 Pl. 9	瀬戸・美濃 磁器か 陶反碗	Ⅱ区埋門中段 口縁部一次	口 10.6 底 3.9	高 5.0	白//	底部器壁は薄く、外面は簡略化した唐草文で、萼部分と花部分を3方に配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重線帯内に附れた「寿」字文。呉須は強化コバルト。	近代。
34	第11階 Pl. 9	瀬戸・美濃 磁器か 陶反碗	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/4欠	口 10.6 底 3.6	高 5.8	白//	外面は縦線状文内に6方所の窓格を配す。口縁部内面は簡略化した文様帯。底部内面は1重線帯内に不明文様。不規則な貫入が入る。	やや焼成不良。 近代。
35	第11階 Pl. 9	瀬戸・美濃 磁器か 陶反碗	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/3欠	口 12.6 底 4.1	高 6.0	白//	他の碗に比して口径大きい。外面は柔福社の花文。口縁部内面はやや幅広の簡略化した文様帯。底部内面は2重線帯内に附れた「寿」字文。	近代。
36	第11階 Pl. 一	製作地不詳 磁器 平碗	Ⅱ区埋門中段 口縁部一部、底部 1/2	口 (10.5) 底 (3.4)	高 3.9	白//	平碗。外面はクローム青緑にこげ茶色上絵具で繪文。内面は花卉文を手描き。口縁、高台内1重線帯内に不明。軸はやや白濁。	やや焼成不良。 近現代。
37	第11階 Pl. 9	瀬戸・美濃 磁器か 丼	Ⅱ区埋門中段 口縁部3/4欠	口 (10.0) 底 6.4	高 7.1	白//	機械轉輪成形で器壁厚く、外面上季と口縁部内面に竹肌状文。	近現代。
38	第12階 Pl. 10	瀬戸・美濃 磁器 皿	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/3欠	口 14.0 底 5.8	高 3.1 3.4	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の窓格を施し、窓格間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は強化コバルト。蛇ノ目型高台。底部やや歪む。	近代。
39	第12階 Pl. 10	瀬戸・美濃 磁器 皿	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/4欠	口 13.9 底 5.7	高 3.1 3.3	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の窓格を施し、窓格間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は強化コバルト。蛇ノ目型高台。	近代。
40	第12階 Pl. 10	瀬戸・美濃 磁器か 皿	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/4欠	口 14.3 底 6.0	高 3.3	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の窓格を施し、窓格間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は強化コバルト。蛇ノ目型高台。	近代。
41	第12階 Pl. 10	瀬戸・美濃 磁器か 皿	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/3欠	口 14.1 底 5.6	高 3.4	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の窓格を施し、窓格間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に簡略化した唐草文。呉須は強化コバルト。蛇ノ目型高台。	近代。

No.	排 回 Pl.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				口 径	高	底 径			
42	第129回 Pl.10	瀬戸・美濃 磁器か 皿	5区埋門中段 口縁部1/4欠	口 径 13.8 底 5.7	高 3.5	底 径 5.7	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に溝みを入れ、溝みに上へ螺旋状文を1本、溝みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に陶略化した唐草文。貝類は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不規則な買入が入る。	やや焼成不良。 近代。
43	第129回 Pl.10	瀬戸・美濃 磁器か 皿	5区埋門中段 口縁部1/4欠	口 径 14.0 底 14.2 6.4	高 3.6 3.8	底 径 6.4	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に溝みを入れ、溝みに上へ螺旋状文を1本、溝みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に陶略化した唐草文。貝類は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
44	第129回 Pl.10	瀬戸・美濃 磁器か 皿	5区埋門中段 口縁部1/4欠	口 径 13.9 底 6.2	高 3.3 3.5	底 径 6.2	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に溝みを入れ、溝みに上へ螺旋状文を1本、溝みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に陶略化した唐草文。貝類は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
45	第129回 Pl.10	瀬戸・美濃 磁器か 皿	5区埋門中段 口縁部1/4欠	口 径 13.6 底 5.7	高 3.4	底 径 5.7	白//	凹線は薄い。口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に溝みを入れ、溝みに上へ螺旋状文を1本、溝みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に陶略化した唐草文。貝類は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
46	第129回 Pl.10	瀬戸・美濃 磁器か 皿	5区埋門中段 口縁部一部欠	口 径 14.0 底 5.9	高 3.3	底 径 5.9	白//	凹線は薄い。口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に溝みを入れ、溝みに上へ螺旋状文を1本、溝みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に陶略化した唐草文。貝類は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
47	第130回 Pl.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	5区埋門中段 口縁部1/4欠	口 径 14.0 底 5.0	高 3.7	底 径 5.0	白//	凹線はやや薄い。高台径は小さい。口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に溝みを入れ、溝みに上へ螺旋状文を1本、溝みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に陶略化した唐草文。貝類は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
48	第130回 Pl.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	5区埋門中段 口縁部1/3欠	口 径 13.8 底 6.0	高 3.2	底 径 6.0	白//	凹線は薄い。口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に溝みを入れ、溝みに上へ螺旋状文を1本、溝みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に陶略化した唐草文。貝類は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
49	第130回 Pl.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	5区埋門中段 口縁部1/4欠	口 径 13.5 底 5.6	高 3.2	底 径 5.6	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に溝みを入れ、溝みに上へ螺旋状文を1本、溝みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に陶略化した唐草文。貝類は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	やや焼成不良。 近代。
50	第130回 Pl.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	5区埋門中段 口縁部1/4欠	口 径 13.5 底 5.6	高 3.4	底 径 5.6	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に溝みを入れ、溝みに上へ螺旋状文を1本、溝みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に陶略化した唐草文。貝類は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
51	第130回 Pl.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	5区埋門中段 口縁部1/4欠	口 径 13.4 底 5.7	高 3.2	底 径 5.7	白//	凹線はやや薄い。高台径は小さい。口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に溝みを入れ、溝みに上へ螺旋状文を1本、溝みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に陶略化した唐草文。貝類は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不規則な買入が入る。	やや焼成不良。 近代。
52	第130回 Pl.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	5区埋門中段 口縁部1/4欠	口 径 14.0 底 5.4	高 3.7	底 径 5.4	白//	体部は外反。口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に溝みを入れ、溝みに上へ螺旋状文を1本、溝みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に陶略化した唐草文。貝類は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
53	第130回 Pl.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	5区埋門中段 口縁部一部欠	口 径 14.3 底 6.0	高 3.5	底 径 6.0	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に溝みを入れ、溝みに上へ螺旋状文を1本、溝みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に陶略化した唐草文。貝類は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
54	第130回 Pl.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	5区埋門中段 口縁部1/4欠	口 径 13.9 底 5.7	高 3.1	底 径 5.7	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に溝みを入れ、溝みに上へ螺旋状文を1本、溝みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に陶略化した唐草文。貝類は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
55	第130回 Pl.11	瀬戸・美濃 磁器か 皿	5区埋門中段 口縁部一部欠	口 径 13.7 底 6.2	高 3.0	底 径 6.2	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に溝みを入れ、溝みに上へ螺旋状文を1本、溝みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に陶略化した唐草文。貝類は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
56	第140回 Pl.12	瀬戸・美濃 磁器か 皿	5区埋門中段 口縁部一部欠	口 径 14.0 底 6.0	高 3.2	底 径 6.0	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に溝みを入れ、溝みに上へ螺旋状文を1本、溝みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に陶略化した唐草文。貝類は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
57	第140回 Pl.12	瀬戸・美濃 磁器か 皿	5区埋門中段 口縁部1/4欠	口 径 14.2 底 6.4	高 3.6	底 径 6.4	灰白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に溝みを入れ、溝みに上へ螺旋状文を1本、溝みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体部外面に陶略化した唐草文。貝類は酸化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	やや焼成不良。 近代。

第4章 検出された遺構と遺物

No.	排 出 Pl. No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				口 径	高			
58	第14期 PL.12	瀬戸・美濃 磁器か 磁器	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/3欠	口 径 13.6 底 6.0	高 3.5	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。胴縁は強化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
59	第14期 PL.12	瀬戸・美濃 磁器か 磁器	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/2欠	口 径 14.1 底 6.1	高 3.6	灰白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。胴縁は強化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	焼成不良。近代。
60	第14期 PL.12	瀬戸・美濃 磁器か 磁器	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/2欠	口 径 13.7 底 5.5	高 3.5	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。胴縁は強化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不明な買入が入る。	やや焼成不良。近代。
61	第14期 PL.12	瀬戸・美濃 磁器か 磁器	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/3欠	口 径 13.9 底 5.7	高 3.1	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。胴縁は強化コバルト。蛇ノ目凹型高台。底部付近の釉が白濁する。	やや焼成不良。近代。
62	第14期 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 磁器	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/4欠	口 径 13.6 底 5.7	高 3.3	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。胴縁は強化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
63	第14期 PL.12	瀬戸・美濃 磁器か 磁器	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/4欠	口 径 13.4 底 5.9	高 3.2	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。胴縁は強化コバルト。蛇ノ目凹型高台。細かな買入が入る。	やや焼成不良。近代。
64	第14期 PL.12	瀬戸・美濃 磁器か 磁器	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/3欠	口 径 13.9 底 5.8	高 3.2	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。胴縁は強化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
65	第15期 PL.12	瀬戸・美濃 磁器か 磁器	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/4欠	口 径 14.1 底 6.0	高 3.2	灰白//	器壁薄し、口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。胴縁は強化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	やや焼成不良。近代。
66	第15期 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 磁器	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/4欠	口 径 13.9 底 5.6	高 3.4	灰白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。胴縁は強化コバルト。蛇ノ目凹型高台。釉は全体に白濁する。	焼成不良。近代。
67	第15期 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 磁器	Ⅱ区埋門中段 口縁部2/3欠	口 径 (13.8) 底 5.7	高 3.4~ 3.7	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。胴縁は強化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
68	第15期 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 磁器	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/2欠	口 径 13.6 底 5.8	高 3.6	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。胴縁は強化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
69	第15期 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 磁器	Ⅱ区埋門中段 口縁部3/4欠	口 径 (13.7) 底 5.4	高 3.2~ 3.5	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。胴縁は強化コバルト。蛇ノ目凹型高台。	近代。
70	第15期 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 磁器	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/2欠	口 径 13.8 底 5.6	高 3.2	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。胴縁は強化コバルト。蛇ノ目凹型高台。不明な買入が入る。	やや焼成不良。近代。
71	第15期 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 磁器	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/2欠	口 径 14.0 底 5.5	高 3.8	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。胴縁は強化コバルト。蛇ノ目凹型高台。釉がわずかに白濁。	やや焼成不良。近代。
72	第15期 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 磁器	Ⅱ区埋門中段 口縁部1/2欠	口 径 14.0 底 6.3	高 3.6	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に螺旋状文を1本、濃みの間に3本の螺旋状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。胴縁は強化コバルト。蛇ノ目凹型高台。釉がわずかに白濁。	やや焼成不良。近代。

No.	排 出 Pl. No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
				口	底	高			
73	第15号 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部一部欠	口 13.6 底 5.8	高 3.7	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に襷敷状文を1本、濃みの間に3本の襷敷状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。須須は酸化コバルト。蛇ノ目四型高台。不明な買入が入る。	やや焼成不良。 近代。	
74	第16号 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口 13.1 底 5.7	高 3.4	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に襷敷状文を1本、濃みの間に3本の襷敷状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。須須は酸化コバルト。蛇ノ目四型高台。不明な買入が入る。高台内中央と高台縁はピンク色を帯びる。	やや焼成不良。 近代。	
75	第16号 PL.13	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部一部欠	口 13.8 底 5.8	高 3.7	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に襷敷状文を1本、濃みの間に3本の襷敷状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。須須は酸化コバルト。蛇ノ目四型高台。不明な買入が入る。高台内中央と高台縁はピンク色を帯びる。	やや焼成不良。 近代。	
76	第16号 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/2欠	口 14.4 底 6.2	高 3.5	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に襷敷状文を1本、濃みの間に3本の襷敷状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。須須は酸化コバルト。蛇ノ目四型高台。不明な買入が入る。磁器は酸化不十分。	焼成不良。 近代。	
77	第16号 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部2/3欠	口 14.2 底 6.0	高 3.5	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に襷敷状文を1本、濃みの間に3本の襷敷状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。須須は酸化コバルト。蛇ノ目四型高台。不明な買入が入る。磁器は酸化不十分。	焼成不良。 近代。	
78	第16号 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部一部欠	口 14.2 底 6.2	高 3.7	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に襷敷状文を1本、濃みの間に3本の襷敷状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。須須は酸化コバルト。蛇ノ目四型高台。不明な買入が入る。磁器は酸化不十分。	焼成不良。 近代。	
79	第16号 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口 13.8 底 5.2	高 3.5	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に襷敷状文を1本、濃みの間に3本の襷敷状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。須須は酸化コバルト。蛇ノ目四型高台。	近代。	
80	第16号 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口 14.2 底 6.0	高 3.7	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に襷敷状文を1本、濃みの間に3本の襷敷状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。須須は酸化コバルト。蛇ノ目四型高台。不明な買入が入る。	やや焼成不良。 近代。	
81	第16号 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口 14.1 底 5.6	高 3.6	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に襷敷状文を1本、濃みの間に3本の襷敷状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。須須は酸化コバルト。蛇ノ目四型高台。不明な買入が入る。	やや焼成不良。 近代。	
82	第16号 PL.14	瀬戸・美濃 磁器か 皿	2区埋門中段 口縁部1/4欠	口 14.0 底 5.6	高 3.5	白//	口縁部内面に1条、底部内面周縁に2条の凹線を施し、凹線間の3方に濃みを入れ、濃み上に襷敷状文を1本、濃みの間に3本の襷敷状文を配す。底部内面に不明文様。体外外面に簡略化した唐草文。須須は酸化コバルト。蛇ノ目四型高台。不明な買入が入る。	やや焼成不良。 近代。	
83	第17号 PL.一	瀬戸・美濃 陶器 底部	2区埋門中段 底部	口 — 底 6.8	高 —	淡黄//	高台内面をのぞき白土刷毛塗り。高台端部を除き灰釉。	19世紀中頃か。	
84	第17号 PL.15	瀬戸・美濃 陶器 皿	2区埋門中段 口縁部1/3欠	口 11.6 底 —	高 1.3	灰白//	灰釉輪縁に底部外面を拭う。相対する口縁部に割縁。割縁縁をかけた部分には口縁。底部内面鉄粒状による傷文。灰釉には買入が入る。	近現代。	
85	第17号 PL.14	製作地不詳 磁器 皿	2区埋門中段 口縁部1/5欠	口 14.0 底 5.8	高 3.6	白//	口縁。底部内面は型で文様を押し、文様部に濃みを入れる。底部内面周縁は2重凹線。	近代。	
86	第17号 PL.15	製作地不詳 磁器 白磁皿	2区埋門中段 口縁部2/3欠	口 14.5 底 8.0	高 2.7	白//	体部は立ち上がり、口縁部は外反。口縁部はリム状をなす。底部内面は型で型を描く。	近代。	
87	第17号 PL.15	製作地不詳 陶器 洋皿	2区埋門中段 口縁部1/4、底部 1/2	口 13.3 底 13.3	高 1.8	白//	リム型ディナー皿。縁とリム部に赤色絵具による凹線。底部内面に赤土絵具による「大文字」。高台内に「FAGLE ROAD」路と王冠をかぶった鷹マークの下絵。縁から買入が入る。	硬質陶器か。 近現代。	
88	第17号 PL.15	製作地不詳 陶器 行平方蓋蓋	2区埋門中段 口縁部2/3欠	口 11.7 底 3.9	高 3.8	灰白//	口縁下部を除く内面に錆色の鉄軸。つまみ裏面と天井部周縁に錆色の鉄軸。天井部外面の軸間に飛び出。つまみ内に「第一中隊曹長室用」。口縁下部に「○○中隊曹長室○」の墨書。	近代。	

## 第4章 検出された遺構と遺物

No.	排 回 Pl. No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考		
89	第18回 Pl. 15	製作地不詳 陶器 土瓶	2区埋門下段 1/4	L1 底	— (9.4)	高 —	灰白//	外面は底部を除き灰釉。体部正面には円形に白土をかけ、白土上に貝類と緑下絵具で施文。	近現代。	
90	第18回 Pl. 一	瓦 軒丸	2区埋門中段 一部	L1 底		高	暗灰//	断面は灰白色。器表は暗灰色。瓦頭面は縁点内に巴文である。縁点内に隈線施す。		
91	第18回 Pl. 一	瓦 残瓦か	2区埋門中段 一部	厚	1.9		暗灰//	断面は灰白色。器表は暗灰色。上面にはキラ付着。端部に押印。		
92	第18回 Pl. 15	瓦 軒丸	2区埋 瓦頭面	径	13.4		暗灰//	断面は灰白色。器表は暗灰色。瓦頭面は縁点内に1重線、隈線内に巴文。		
93	第18回 Pl. 15	瓦 不詳	2区埋 一部	厚	2.3		暗灰//	断面は灰白色。器表は暗灰色。瓦頭面は縁点内に1重線、隈線内に巴文。		
94	第18回 Pl. 15	製作地不詳 磁器 丸碗	1区掘瓦 1/4	L1 底	(7.8) (3.8)	高 5.7	白//	L1埋部外面と高台外面、高台内周縁は染付による細い隈線。外面隈線間、2重丸内「福」、「寿」字文を散らす。高台端部外面は斜めに削る。高台内周縁は1重隈線。呉漆はやや黒味を帯びる。	近現代。	
95	第18回 Pl. 一	磁器 白磁皿	2区埋 L1埋部1/8、底部 1/4	L1 底	(9.8) (5.0)	高 2.5	白//	側部は縁をなし、L1埋部は外反。内面は型による双喜文か。	近代。	
96	第19回 Pl. 16	金属製品 煙管	一括	長 幅	13.0 1.0	高 重	0.8 9.8	//	火皿から吸い口までを金属で一体製作したキセルでらうにあたる部分を鉄さびが覆う。破損した端部でわずかに上向きに曲がり火皿につくことと見られる。らう部分の断面は横に広い楕円形で下側に接合あとが観察される。	
97	第19回 Pl. 16	鉄製品 釘	南側法面中斷一 括	長 幅	5.3 0.5	高 重	0.6 5.4	//	断面はほぼ正方形の釘と見られる鉄製品で緩やかにねじれるように曲がっている。頭部は角形で折り返し等は見られない。他端は劣化後破損。	
98	第19回 Pl. 16	鉄製品 釘	南側法面中斷一 括	長 幅	5.1 0.6	高 重	0.6 4.4	//	断面はほぼ正方形の釘と見られる鉄製品で緩やかに曲がっている。頭部に直交する形で錆化した木質が残存する。頭部は角形で折り返し等は見られない。他端は劣化後破損。	
99	第19回 Pl. 16	金属製品 不詳	一括	長 幅	5.4 5.9	高 重	0.4 12.9	//	断面はほぼ円形の輪で変形し一か所割れて開いているが、本来は輪状に組じたとみられる。	
100	第19回 Pl. 16	鉄製品 不詳	一括	長 幅	7.1 7.0	高 重	1.2 33.5	//	直径7cmほどの薄い鉄板周囲に高さ0.8cm程度の縁が立ち上がるがねじや固定用の孔の痕跡等は確認できない。	
101	第19回 Pl. 16	鉄製品 釘	一括	長 幅	11.6 6.7 0.5 0.4	高 重	0.5 0.4 14.5	//	両釘2本が交差した状態で踏付く。両方とも頭部は見られず先端も残っていない。1本は端部でく字に折れ曲がり破損する。	



1区現況(平成25年7月撮影)



2・3区現況(平成25年7月撮影)

## 第5章 調査の成果とまとめ

### 第1節 出土陶磁器

2区-①東側の区域から、陶磁器がまとめて出土した。梅ノ木郭南側にある堀をまたぐ埋門の、南側土台となる張出部の上位から出土したもので、埋没土中からの出土である。出土層位からみると、埋門が機能していた時代のものではなく、堀を埋めたころのものと推定される。これらの陶磁器について、下記のように、当事業団大西雅広の所見がえられた。

今回の調査地点は、高崎城梅ノ木郭堀の埋門があった場所である。しかし、出土遺物のほとんどは埋土中から出土した近代陶磁器である。調査面積に比して出土量は多く、中でも磁器碗と皿は接合率が高く文様も揃っており、多くは一括購入・一括廃棄されたものと推測される。高崎市教育委員会が隣接地で行った梅ノ木郭堀の調査でも「石炭ガラを主体とする層があって、この層に限って狭い範囲内に陶磁器や瓦片が多く含まれていた」。また、磁器に「型紙摺や銅板転写の製品は出土していないことや、「土官会食所」の墨書から十五連隊創設以前の鎮台兵舎で使用された食器類と推定している<sup>(1)</sup>。

堀から出土した陶磁器で器形・文様ともに揃っているのは磁器の碗と皿である。図示可能な陶磁器はすべて図示しているので、掲載比率は出土比率に近い。碗は明らかに混入である湯飲み(第9図1)を除き、図示したのは35点である。35点のうち端反碗が29点、丸碗が4点、平碗が1点(第11図36)、不明碗1点(第9図6)である。これらのうち、平碗と不明碗の各1点は残存率が低く、一括廃棄品ではない可能性がある。丸碗は2重円内に「福」、「寿」を染付した2点(第9図2・3)と上絵具で「大学」と記した2点(第9図4・5)がある。共に残存率が高いが、呉須の発色と絵付けが端反碗と異なる。また、第9図4の文字は輪郭が濃く中央が薄いことから、ゴム印版上絵の可能性もある。このため、丸碗4点が端反碗に伴うとは言い切れない。また、2重円内に「福」、「寿」を染付け

た丸碗(第18図94)は堀以外の場所からも出土している。

端反碗はやや大ぶりの第11図35を除き、酸化コバルトを用いたと考えられる手描き染付である。第9図11から第10図20の10点はほぼ同文様である。秋草状の文様を施した端反碗は8点(第10図21～第11図28)出土している。これら以外は数が少なく、第11図29から31の3点、第9図9・10の2点が同文様で、他は各1点である。

皿は、内面文様が同様な手描き染付が45点(第12図38～第16図82)出土しており、いずれも酸化コバルトを用いたと考えられる。これらのうち10点(第15図73～第16図82)は外面無文である。個々に器厚や器形、文様に多少の違いはあるものの、数が多いうえに残存率が高く一括性が高いと考えられ、端反碗同様、一括購入・一括廃棄されたと推測される。洋皿(第17図87)は、文字から丸碗(第9図4・5)と同時期と考えられるが、端反碗に伴うか否かは不明である。

東京および周辺の消費地遺跡一括資料における中型碗は長佐古氏によりフェーズIからフェーズVの5段階区分がなされている<sup>(2・3)</sup>。堀中段から出土した磁器中型碗はすべて染付文様が手描きのA類(端反形碗)で、1点を除いて人工のコバルトを用いていると考えられる。また、型紙刷が認められないことから、フェーズIに相当すると考えられる。フェーズIの年代観は明治一桁年代後半～十年代中頃と推定されている。

高崎城跡地は明治4年に県庁が置かれ、翌5年兵部省の管轄下となった後、陸軍省に引き継がれ、東京鎮台下の兵営として整備されていった。その後、明治17年に東京鎮台高崎分営は廃止され、歩兵第十五連隊が置かれている<sup>(4)</sup>。この年代は先のフェーズIの年代とほぼ一致し、磁器碗や皿と共に出土した行平か鍋の蓋に「第一中隊曹長室用」の墨書が認められること。また、東京鎮台高崎分営は本丸内に置かれていたこと、調査地点は歩兵第十五連隊時には兵舎と兵舎の間にあたり、連隊期には

理め立てられていた可能性が高いことなどから、出土した陶磁器の多くは東京鎮台高崎分営設置時に一括購入され、歩兵第十五連隊創設に伴う理め立て時に一括廃棄されたものと推定される。

## 注

1. 高崎市教育委員会「高崎城Ⅷ・Ⅸ 高崎城三ノ丸遺跡」1994 62・305頁  
梅ノ木郭からは同文様の磁器端反碗と皿が出土している。また、SD 7出土近代陶磁中にも同文様の磁器端反碗と皿が認められる。SD 7出土近代陶磁の産地が一時期か二時期以上かは不明であるが、購入時期が二時期以上である可能性もある。
2. 長佐古貞也「続・お茶碗考 一近代・現代の中形碗に飯碗を探る―」『考古学が語る日本の近現代』ものが語る歴史 14 同成社 2007 176～178頁
3. 長佐古貞也「消費地から見た瀬戸・美濃窯一ご飯茶碗を中心に―」『瀬戸・美濃窯の近代―生産と流通― シンポジウム資料集』公益財団法人瀬戸市文化振興財団2012 21・22頁
4. 清水吉二「十五連隊の高崎設置」『新編 高崎市史 通史編 4』高崎市 2004 110～115頁

## 第2節 埋門

2区-①東側の区域で検出した遺構は、梅ノ木郭南側にある堀の南岸側の土台(いわば橋台)となる張出部に相当するよう思える。以下、絵図等を参照してみたい。

第20図は高崎市教育委員会が製作したもので、高崎城の施設の位置を現代地図に重ねたものである(元図はカラー)。本丸東側の榎木門(つきのきもん)を通ると梅ノ木郭に至る。梅ノ木郭の北側に梅木門があり、これを通ると二の丸に出る。梅木門の反対側(南側)に埋門が位置する。

第21図は享保12年(1727年)の絵図で、高崎市教育委員会の整理により「No.17 御城破損之所所願絵図」とよばれるもので、その一部を示した。全体に立体的な表現になっており、「埋門」文字の南側の土塁をくぐる門があり、門を通過して南側に出ると構造物が描かれている。その南側に梯子状の施設が水没したように描かれている。門自体は判然としないが、土塁の覆いの下に存在するのであろう。堀の南側からも梯子状の施設が北へ延び、両者の間は堀の水が描かれている。

第22図は享保6年(1721年)に遡るが、「No.40 チリ防木こく今度植候所絵図上ル控」と呼ばれる絵図で、梅ノ木郭南側の堀が描かれ、南北に立体的表現の張出部が

あって、そこから梯子状の施設が水没したように描かれている。引出線の先に「橋クワ三尺す竹木コクアリ」と注記されている(木コク=「からたち」のことらしい)。

解説によると、埋門は「桁行1間2尺3寸、梁間2間の小さな門」とされ、「土居と同じように土を盛ってあった」という。つまり土塁のように土を積み上げたところにトンネル状の空間があり、ここに門が設置されていたと推定され、これを「埋門」と呼んだのであろう。南側土塁北辺に隅切りが描かれていることから、ここが「埋門」の位置と考えられる。南北の堀に水没する梯子状の施設は、片側が土台上に固定されて、他端が水面下であり、通常時は渡ることのできない橋状の施設である(2区で検出した堀中の杭は先端部を支えた杭か)。この施設の上に、せり出す橋板を渡せば、水上を通行することができる。あるいは水没する他端を跳ね橋のように持ち上げて利用するものか。日常的には梅ノ木門から出入するのであろう。

第23図は明治18年の高崎城の様子を示す地図で、『第一軍管地方迅速測図』のなかの「高崎」の一部である。図左肩に「明治十八年測量同廿一年製版同年六月廿九日出版」と記入されている。その図に現裁判所建物を加筆してみたところ、標高点らしき「104.9」の文字の「10」の南側に相当するらしいことが判った。縮尺約1/1万で、誤差を含んでいる。本丸北側に「練兵場 高崎分営」と記入されており、すでに軍事施設として利用されていることが判る。また、本丸北辺の土塁がほぼ直線的に東へ延びて描かれ、土塁の南側に建物が散在している。本丸南側の堀は描かれているが、東側の堀は描かれていないことから、この時点で梅ノ木郭を囲む堀、二の丸北東部を囲む堀は、埋められていたと推定される。このことと、出土陶磁器の観察・編年観を併せると、出土陶磁器は明治18年以前の流通品で、堀を埋めたときに投げ込まれたものか、後日、ゴミ穴に埋められたものと考えられる。

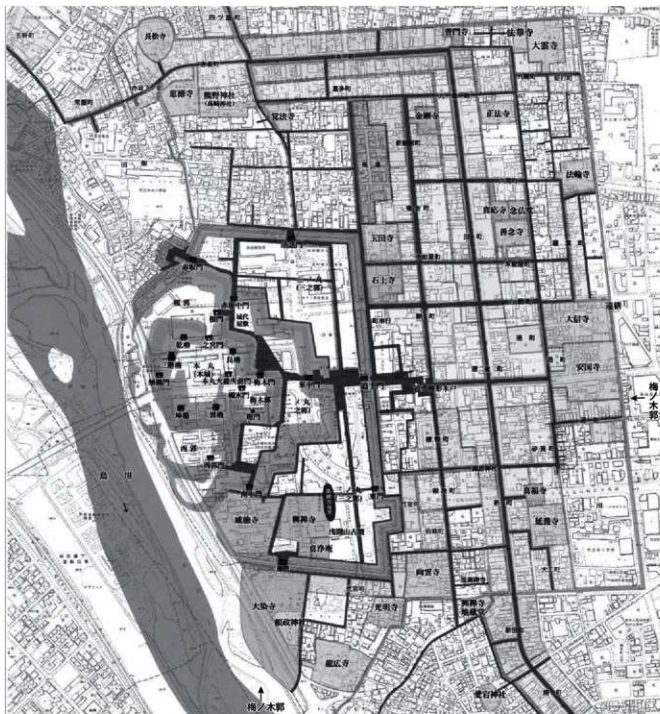
第24図は高崎城第10次調査の調査区域を、同報告書から引用したものである。裁判所建物の北側に新しい建物を建設するため、その事前の調査が平成3年(1991年)に実施された。この調査では、中世の石組み遺構と池状遺構のほか、溝・井戸・土坑が発見され、高崎城以前の中世和田城にかかわる遺構と考えられている。また、この地点での近世の遺構は、瓦を一括投棄した穴である。し



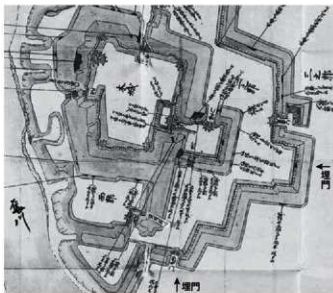
たがって、近世の遺構は、梅ノ木郭の構造に直接かわる遺構ではないように思える。

以上のように、江戸時代の絵図、近代の地図、現代の調査履歴からみると、今回の調査で検出した遺構は「埋

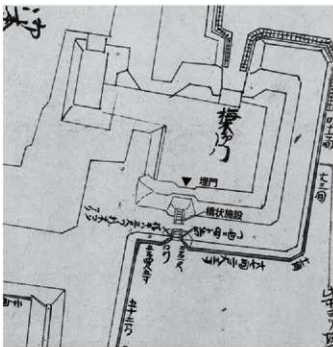
門」そのものではなく、江戸時代の絵図に描かれた埋門の近くに位置する、埋門南側の堀の南岸にある土台(橋台相当)を検出したとみられ、梅ノ木郭の一部を明らかにしたと考えられる。



第20図 高崎城 梅ノ木郭の位置 『高崎市史資料集1 高崎城絵図』平成18(2006)年、1頁に加筆



第21図 高崎城 梅ノ木郭 埋門の位置(1)  
『No.17 御城破損之場所御願絵図』享保12年9月  
『高崎市史資料集 1 高崎城絵図』平成18(2006)年、17頁の一部に加筆。



第22図 高崎城 梅ノ木郭 埋門の位置(2)  
『No.40 チリ防木こく今度植候所絵図上ル控』享保6年9月27日  
『高崎市史資料集 1 高崎城絵図』平成18(2006)年、45頁の一部に加筆。▼埋門の位置。



第23図 明治18年の高崎城跡  
『第一軍管地方迅速測図』「高崎」の一部に加筆。  
■前橋地家裁高崎支部の推定位置。



第24図 高崎城第10次調査の調査区域  
『高崎城X 高崎城梅ノ木郭遺跡』高崎市遺跡調査会、1993、10頁に加筆。■第10次調査の位置

# 写真図版



1区全景 北から



1区全景 東から



1区全景 北から



1区 基本土層断面-a-b 南から



2区-①全景 北から



2区-①西側全景 西から



2区-①東側全景 東から



2区-①西側堀内 西壁基本土層断面a-b 東から



2区-①東側 北西から



2区-①東側堀内 土層断面g-h 東から



2区-①東側埋門南堀土層 遺物出土状態 北から





2区-②煉瓦とコンクリートの基礎1 東から



2区-②煉瓦とコンクリートの基礎2 西から



2区-①東側 梅ノ木郭埋門南堀南側 北から



2区-①東側 梅ノ木郭埋門南堀南側 北東から



2区-①東側 梅ノ木郭埋門南堀南側 北西から



2区-① 北壁基本土層断面c-d 南から



2区-②トレンチ 西から



2区-①東側 梅ノ木郭埋門南堀 北東から



2区-②トレンチ 南壁基本土層断面e-f 北から



2区-①東側 梅ノ木郭埋門南堀1 北から



2区-①東側 梅ノ木郭埋門南堀2 北から



2区-①東側掘削底面 杭出土状態 東から





2区-①東側 木杭・石出土状態 東から



3区全景 東上空から



3区全景 西上空から



3区全景 東から



3区全景 西から



3区全景 北から



3区 西壁土層断面c-d 東から





20



21



23



24



26



27



28



29



30



31



32



33



37



34



35



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



61



63



64



65









76



77



78



79



80



81



82



67

62



85



1区 出土遺物





## 報告書抄録

書名ふりがな	たかさぎじょういせき21
書名	高崎城遺跡21
副書名	前橋地家裁高崎支部庁舎耐震改修等工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	574
編著者名	関 晴彦/坂口 一/大西雅広/関 邦一
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20130924
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	たかさぎじょういせき
遺跡名	高崎城遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさぎしたかまつちょう
遺跡所在地	群馬県高崎市高松町26番地2
市町村コード	102020
遺跡番号	506
北緯(日本測地系)	361913
東経(日本測地系)	1390016
北緯(世界測地系)	361924
東経(世界測地系)	1390005
調査期間	20120501-20120531
調査面積	293㎡
調査原因	前橋地方家庭裁判所高崎支部庁舎耐震改修等工事
種別	城郭跡
主な時代	近世/近代
遺跡概要	近世門跡1+堀跡1/近代陶磁器+金属製品+木杭
特記事項	江戸時代の城跡
要約	近世高崎城梅ノ木郭門門の南堀及び南岸の一部を検出。幕末～明治初め頃の陶磁器が一括出土。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第574集

## 高崎城遺跡 21

前橋地家蔵高崎支那汗舎耐震改修等工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

---

平成25(2013)年9月17日 印刷

平成25(2013)年9月24日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／ジャーナル印刷株式会社

---

